

SCOPEⅢ

No. 11

愛知教育大学

教職キャリアセンター

教科教育学研究部門

教職キャリアセンター

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

TEL:0566-26-2316

<http://www.aichi-edu.ac.jp/kyo-car/>

1. 特集「新型コロナと学校教育」

山田 篤史（教科教育学研究部門代表／数学教育講座）

新型コロナの流行が始まって1年あまりが経ちました。ちょうど昨年度末の今頃、殆ど何の根回しも無く休校措置が決まり、5月中頃まで自宅待機が続きました。これまで小中高等学校では、少しずつ学校での対面授業を再開させてきましたが、大学では、今でもかなりの学部授業がリモートやオンデマンドで、大学での教育とは何かを、改めて考えさせられることとなりました。教職キャリアセンター・教科教育学研究部門でも、本年度は特殊な年になるであろうことは年度当初から予想されたことでしたので、本年度のテーマを「新型コロナと学校教育」として、月例会でも、メンバー各自の周りで起こっていることを報告し、できるだけ現場で起こっていることを知ろうと務めた次第です。本号では、各教科の先生から、このコロナ禍1年を経ての思いを綴って頂く事にいたしました。現場の先生にも、「新型コロナと学校教育」について、各教科の大学教員がどのような考えを抱いているか、お伝えできれば幸いです。

目 次

1. 特集「新型コロナと学校教育」（山田 篤史／教科教育学研究部門代表・数学教育講座）	1
2. 令和2年度教科教育学研究部門の研究活動報告	2
(山田 篤史／教科教育学研究部門代表・数学教育講座)	
3. 特集「新型コロナと学校教育」	3
新型コロナウィルス・ICT教育・言語活動（丹藤 博文／国語教育講座）	4
子供自身が幸せな社会を創るためにには？（真島 聖子／社会科教育講座）	5
新型コロナが再認識させた算数・数学教育の宿題（山田 篤史／数学教育学講座）	6
コロナ禍における理科授業のあり方とは（大鹿 聖公／理科教育講座）	7
学校という場の必要性（西野 雄一郎／生活科教育講座）	8
「Covidと音楽活動～音を出すだけが音楽活動ではない～」（新山王 政和／音楽教育講座）	9
新型コロナと学校教育（杉林 英彦／美術教育講座）	10
コロナ禍転じて福となすアイデア（鈴木 一成／保健体育講座）	11
新型コロナウイルスパンデミックと教育のニューノーマル（太田 弘一／技術教育講座）	12
新型コロナウイルス感染症流行期の調理実習（筒井 和美／家政教育講座）	13
対話活動の工夫 -Writingによるコミュニケーション活動-（松井 孝彦／外国語教育講座）	14
道新型コロナと道徳教育（野平 慎二／学校教育講座）	15
新型コロナウィルス感染拡大が学校教育に与えた影響について（飯塚 一裕／特別支援教育講座）	16
保健の授業における感染症のこれまでとこれから（山田 浩平／養護教育講座）	17
保育現場におけるCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）の禍を追う （鈴木 裕子／幼児教育講座、横井 良憲／大学院幼児教育領域）	18
コロナ禍における大学教育のとりくみを振り返って（斎藤 ひとみ／情報教育講座）	19
4. 編集後記（山田 浩平／教科教育学研究部門副代表 SCOPE 編集担当・養護教育講座）	20

2. 令和2年度 教科教育学研究部門活動報告

山田篤史（教科教育学研究部門代表／数学教育講座）

◆ 大学・附属学校共同研究会

- ・16分科会・2プロジェクトで大学教員と附属学校教員が共同研究を実施、年度末に報告書を発行
- ・2020年6月24日(水) 大学・附属学校共同研究会代表者会議
報告書の作成について、運営費(物品購入費・交通費)について

◆ 部門誌「SCOPEⅢ」の発行

- ・テーマ「新型コロナと学校教育」
- ・「SCOPEⅢ」第11号を発行、県内の全小中学校等に配布予定

◆ 環境整備

- ・小学校用教科書（平成32年度使用）60種302点を購入し、教育未来館3階に配架した

◆月例会

○ 6月例会 2020年6月24日(水) 教授会終了後

今年度名簿の確認、テーマ選定、役割分担、月例会の内容及び発表者の計画立案、予算について

○ 10月例会 2020年10月28日(水) 16:40-

報告者： 安藤 久美子 講師（心理講座）

研究報告：「コロナ休校と子どもたち」

SCOPEⅢについて、報告書について、運営費について

○ 11月例会 2020年11月25日(水) 16:40-

報告者： 加藤 兼幸 准教授（教職実践グループ）

研究報告：「新型コロナ禍と道徳教育」

SCOPEⅢの執筆者について、運営費・旅費について

○ 1月例会 2020年1月27日(水) 16:40-

報告者： 斎藤 ひとみ 准教授（情報教育講座）

研究報告：「コロナ禍における本学及び他大学、高校の遠隔授業の取り組み」

令和3年度のテーマについて、SCOPEⅢについて、報告書について

3. 特集「新型コロナと学校教育」

新型コロナウィルス・ICT 教育・言語活動

丹藤 博文（国語教育講座）

教育実習で訪れた小学校の校長は、苦笑いしながら、こうおっしゃった。「学校で 3 密を避けろと言われても、学校というところは、そもそも 3 密を前提としたところですから……。」人と会い、会話をし、交流するといった機会を奪われ、声や身体を封じられたところで、教育がいかに困難かをあらためて認識させられたのは私 1 人ではなかったと安堵した。しかし、疫病による一過性の対応を余儀なくされたということですまさないところに問題の深刻さがある。例えば、政府は ICT 教育の推進を宣言し、産業界は日本の教育の ICT 化の遅れを取り戻すとして積極的な働きかけをしている。すでに、来年度からアイパッドが導入されようとしており、教室には大きな充電器が備え付けられもしている。

「さあ、今日は『ごんぎつね』をやるよ。ダウンロードしなさい。」と指示する時代が来るのではないかと半ば冗談として話していた未来予想図がもうそこまで来ている。

大学の授業も、前期はオンラインであったが、後期は対面型も併用したハイブリッド型が主流を占めているようだ。私も、ZOOM により演習やゼミナールを実施したが、30 年以上学校や大学の教壇に立って授業をしてきた者としては、言われるような、学びの共同性が稀薄とならざるをえないこと、教師と生徒との情動や熱量といった要素は伝わりにくいといったことのほかに、次のような感想を持った。第 1、情報量が圧倒的に少ない。対面型の授業においては学生のその日の様子から教室の雰囲気までさまざまな情報をもとに、それに対応するかたちで授業を進めていくのがフツーである。しかし、四角いディスプレイからは、そのような情報を得ることができなかつた。第 2、非言語的コミュニケーションが活用できない。授業は、人間と人間との活動である以上、発問や指示といった言語によって遂行されるが、身振りで補足したり、生徒の表情で理解の度合いを推測したりといった非言語的なコミュニケーションも重要な構成要素である。オンライン授業ではもそのような非言語的要素を活用することはほとんどできなかつた。第 3、若い頃、先輩教師から授業には〈間〉が大事とか教えられたが、関係性が希薄なところに〈間〉が機能するとは思えなかつた。何か、これまで自明してきたもの、大事に扱ってきたことが簡単に反故にされたような居心地の悪さ、苛立たしさ、歯がゆさのようなものを感じたことは確かである。しかし、それは、未だ言葉にできないでいるだけに、いつそう始末に困るのである。これにとどまるものではないが、以上あげたことをもってしても、オンライン授業の登場あるいは日常化によって、教育や授業にとって、何が大事で何かそうではないかが逆に浮き彫りとなってくる。

オンラインであろうとなかろうと、つまるところ、問われているのは、教える者ひとりひとりの教育観であり授業論なのであろう。放っておくと、児童・生徒は、一日の多くの時間をスマホに費やし、動画に親しんでいるらしい。では、「LINE」でコミュニケーションするのと、実際に会って話をするのとでは何が違うか。脳の前頭前野の活性化に差異が見られるというデータがある。会って話した方が、脳は活性化するのである。画面にタッチするより、手で紙に書いた方が脳は働く。前頭前野とは、思考力や想像力といった人間らしい能力を司る部位である。世界に遅れをとらないための ICT 化もけっこうだが、子どもの脳が退化し、思考力が衰えては何もならない。ICT 化の波は不可避だとしても、子どもにとって何が大事で、何は大事でないといった判断も必須であり、とりわけ言語能力の育成に責任のある国語教育の責任は重大であると言わねばならない。責任が重大という意味は、何も新しい事態に対応すべきというより、日記や作文の指導だとか、授業での話し合いや発表だとか、国語の授業のみならず、学校で日常的に行われている言語活動自体が、いかに大事なことであるかの再認識も必要ということである。ICT 教育推進の時代であればこそ、読み・書き・話し・聞くといった素朴な言語活動それ自体が、子どもの全人的な発達と成長にとって不可欠であることをあらためて銘記したいものである。

子供自身が幸せな社会を創るためにには？

真島 聖子（社会科教育講座）

新型コロナウィルス感染症の拡大は、日本のみならず世界全体に及ぶ社会的危機である。この社会的危機によって、これまで以上に私たちの生活と政治が密接に関わっていることを実感する機会が増えた。これまでの社会科授業では、政治を身近に感じられないことが課題であったが、目の前の社会的危機に対して、政府や自治体の首長が、どのような政策を打ち出して問題の解決を図ろうとしているのか、日々のニュースや記者会見などでリアルタイムに知ることができる。また、リアルタイムに知った情報は、学校の休校やマスクの配付、給付金の支給、休業要請、時短要請、在宅勤務やテレワークの要請、不要不急の外出や会食の自粛要請、一連の Go To キャンペーンなど、様々な政策として実施され、その政策の是非が問われるとともに、子供たちとその家族にも直接影響を与えている。

学校生活では、子供たちの行動や活動を制限するような感染症対策のルールが、市町村の教育委員会や学校単位で作られて実施されている。最初のルール作りは、緊急的な措置として、責任者である大人が情報を収集し、学校や地域の状況に応じて情報を整理分析し、その時点で最も適切だと考えられる判断をしてルールを決定する。しかし、その後は、状況が変化するため、状況に応じたルールの見直しが必要となる。その際、ルールの見直しには、子供たちの意見を聞く機会をつくったり、ルールの見直しに子供たちが参加できる場を設定したり、子供たちの意見が反映される意思決定の場を確保したりすることを推奨したい。なぜなら、子供たちの意見を聴いたり、考えを取り入れたり、子供たちの選択判断や意思決定を尊重する行為は、子供たちを信頼していることの現れであり、子供たちは、教師から頼られ、任されることによって、学校生活に関わる参加意識を高め、子供たちの当事者意識や責任感が育まれるからである。

それではなぜ、このようなプロセスが重要なのか？理由は 2 つある。1 つは、社会科の授業の中で、どれだけ選択判断や意思決定を行ったとしても、実際の社会で自分たちの選択判断や意思決定がどれだけ通用するのかわからないため、子供たちが本気で挑む場が必要だからである。もう 1 つは、子供たちの精神的な幸福度に問題があるからである。みなさんは、日本の子供たちの精神的幸福度が、先進国 38 カ国の中で何位だと思われるだろうか。ユニセフ・イノチエンティ研究所が、2020 年 9 月 3 日に発表した報告書『レポートカード 16』によると、日本の子供たちの精神的幸福度は 37 位。ワースト 2 位という結果となった。この調査で用いられた指標は、生活満足度が高い子供（15 歳）の割合と 15～19 歳の自殺率（10 万人あたりの自殺者数）である。

「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力を育成する」ことは、小・中・高の社会系教科の共通の目標である。ユニセフの調査結果を踏まえて考えてみると、「子供自身が幸福な国家及び社会を形成する」という視点がこれまでの社会系教科の目標にはなかったことに気付かされた。平和で民主的で、子供自身が幸福な国家及び社会とは、どのようなものだろうか。それは大人から一方的に与えられるものでも、すでに理想的な姿として存在するものではなく、子供自身が自らと他者の幸福を問い合わせ、仲間や協力者と共に創り上げるものではないだろうか。子供自身が自らの学校生活を幸せな場にするためには、大人である私たちが、まず、子供たちの意見に真剣に耳を傾け、子供たちが参加する機会を多様に保障し、子供たちの意思決定を尊重するところから始めたい。

新型コロナが再認識させた算数・数学教育の宿題

山田 篤史（数学教育講座）

新型コロナが生み出した様々な社会状況は、社会の脆弱性をより顕在化させたと言われる。教育の分野でも、以前から積み残してきた課題を再認識させられる機会となった感があるが、算数・数学教育に焦点化して、幾つか私見を述べておこう。

一つ目は、硬直化した教授・学習形態（のイメージ）からの脱却である。算数・数学の学習といえば、紙と鉛筆（黒板とチョーク）を使って「教師や教科書や問題集が与える問題に取り組み」、その問題解決の過程で得られたアイデアを精緻化・一般化し、それを別の問題・文脈に活用することを学ぶ、というイメージが強い。それは間違いでないし、今日では教師の一方的な説明による授業も少なくなったのだが、与えられた問題を紙と鉛筆で解く、という算数・数学学習のイメージには根深いものがある。コロナ休校下でも、そのイメージに固着したリモート/オンデマンド授業や課題ばかりであったのであれば、少し残念な気もする。時間を上手く使うことができる児童生徒であれば、「自ら問題を見つけ（作り）、その問題に長時間粘り強く取り組む」という経験（例えば、オープンエンドな問題に取り組んだり、問題づくりや実験数学に親しんだりする経験）が得られたかもしれないし、定番の数学啓蒙書に出会える経験が得られたかもしれない。あるいは、日々の授業では時間的制約故に敬遠されがちが、試行錯誤や工作的な作業が伴う学習（例えば、図形の敷き詰めや正多面体の作成、測量など）に取り組むよい機会が得られたかもしれない。確かに「内容の網羅」は重要であるし、履修確認のための作業的課題があることは致し方ないが、提出を求める課題の中に上記の様な課題が含まれていれば、子どもたちの算数・数学学習のイメージは変わっていたかもしれないと思われるのだ。

二つ目は、ICTを活用した授業・学習コンテンツの蓄積不足である。これは、上記の課題とも大いに関係する。世界的に見れば、算数・数学教育におけるICT活用は、情報化の波に伴う1990年前後から盛んになり出したが、わが国では、電卓や表計算ソフトでさえ学習の道具として普及せず、ICT環境を活用した授業・学習コンテンツの作成・蓄積にも、積極的でなかったように見える（結果的に、それらは殆ど商業ベースのコンテンツに頼る事になってしまった感がある）。もちろん、我々にICTを活用した授業・学習コンテンツを蓄積する時間的・労力的余裕が無かったのは事実だが、そもそも我々の算数・数学学習のイメージが、紙と鉛筆を使うもの、数式を媒介にしたものに偏りすぎていたのではないか、とも思われるのだ。個人的には、例えば、小さな動画でもよいと思う。測定領域における測定の実際、図形領域における様々な作図法や作図題、折り紙を使った幾何、立体の分解や展開図の作成、関数領域における具体的な関数と事象との結びつきなど、知識・技能面の学習を支援する小さな動画教材にできそうな話題は多数ある。それらは、過去には教具や課題提示の工夫との連動で実現されていたことだが、今はどうなのだろう（もしかすると、多くの教員のHDDには、そうした動画が隠れているかもしれないが）。ICT環境を上手く使った授業や学習コンテンツの地道な蓄積は、実は日頃の授業負担を軽減したり、学習の個別化を支援したりするかもしれない、その意味では、地域の研究会などをベースに、今から始めてよい作業のように思われる。

今回のようなことは二度と経験したくはないが、それでも次回を想定し、宿題として課題を整理しておいてはどうだろう。

コロナ禍における理科授業のあり方とは

大鹿 聖公（理科教育講座）

令和2年4月から、改訂された学習指導要領に基づく新しい教育課程が始まり、21世紀を生き抜く児童・生徒の資質・能力を育む教育が華々しく展開される予定であった。しかしながら、その数か月前に発生した新型コロナウィルスの影響により、3月から学校が封鎖され、新しい教育を始めるどころか、学校が開かれないと状況で新年度を迎えることとなった。その後、学校教育は始められたが、対面での授業運営もままならず、主体的、対話的で深い学びを体現する理科授業が実現できないまま教育課程だけが進行することとなった。

理科では、児童・生徒による実験観察活動を中心として、学習課題を問題解決や科学的探究の手法によって、科学的に学習を進めていくことが期待されている。しかしながら、コロナ禍の状況での授業は、児童や生徒がお互いに顔を突き合わせて操作、作業する実験観察を行うことはもちろん、お互いに意見や考えを交流することも難しい状況となっている。そのような中、学校では休校中に取り組まれたオンラインによる授業提供などもあり、全体的に学校環境として通信環境が整えられ、また、タブレットが個人に配布されるなどICT機器を利用した授業展開が期待できるようになっている。

理科という授業は、自然の事物・現象を理解するために、観察や実験などの活動を通して、明らかにしていくものである。本来は、実験観察の直接体験から学ぶものとされているが、実際に実施できない事象や、直接提示できない現象も多数存在する。それらについてICT機器を活用することで、擬似的に視覚化したり、モデル化したりすることで理解を促すことが可能となる。また、さまざまな事象や現象を画像や動画として視聴したりすることで、学習内容を共有したりすることもできるようになった。また、今年度から導入が決まったプログラミング教育の実現にも一役買うこととなった。さらに、ICTの活用により、科学的な事象についての考え方や概念を共有したり、交流させたりすることで、対話的な学習を効果的に実施できるようになった。これらはコロナ禍における副次的な環境整備によるものであり、今後、積極的に、理科授業においても活用されていくことと思われる。

このように、ICTの普及などで直接、実験観察を行わなくても、それに近い形での情報提供などにより授業自体は実施可能になった。しかし、理科教育が本来目指すべき目標は、科学的な探究の過程において、理科の見方・考え方を働かせて自然の事物・現象を理解することである。特に、科学的探究の過程で培われるさまざまな問題解決の力（プロセス・スキル）は、個人の思考や表現を求めているが、その基盤となるのは、子どものさまざまな体験による知識・技能が基盤である。ICTなどから得られる様々な情報は主に視覚と聴覚に限定され、嗅覚や触覚についての情報は極めて限定されている。小学校での事象は、子どもの身近な事物・現象であり、直接体験することから、さまざまな情報を吸収していく。さらには、子ども同士が対話しながら、その表現方法を精緻化していく。直接体験でしか得られない情報も理科の概念の形成に必要となるのである。

今後、ICTの普及でより多くの情報が入手可能になり、活用の幅も広がることと思うが、それに限らずのことなく、理科の見方・考え方を働かせるように、情報機器による情報も大いに活用しながら、それでは得られない身近な直接体験や、具体的な実験検察活動をいかに組み合わせて、「よりよい理科授業とは」を各自が考え、新しい理科授業を実践していただきたいと考える。

学校という場の必要性

西野 雄一郎（生活科教育講座）

新型コロナへの対応の中で、学校教育自体のあり方が問われている。そもそも、なぜ学校に通う必要があるのか。学校外の学習によって学校教育で求められていたことが達成できるのであれば、学校に通う必要はなくなるのではないか。このような問われ方が必然的に生じる事態において、本学生活科選修の1年生とともに、「小学校に行かずとも生活科の学習は成立するのか」というテーマで議論を行った。学生からの意見としては、「家庭によって教育力に差がある。全員がオンライン授業に参加できる環境があることが前提となる。」というものや、「生活科の飼育・栽培などは、オンライン授業が成立すれば実現可能ではないか。むしろ、オンライン授業で画面ごとに成長した花の姿などを発表することで、視覚的に他の子どもたちに分かりやすくなると思う。発表者は、紹介したい花の部位を画面に大きく映して発表するなどの工夫をすることもできると思う。」というものがあった。なるほど、ビデオ会議ツールを用いることにより、動植物の生長過程を伝えやすくできる可能性がある。ただ、生活科学習において相互交流する機会は、話し合いの場面においてだけではない。他の意見として、「学校に行かなければ隣の子が工夫しながらおもちゃを作っているのを見て、自分もそこから学んだり、自分が困っていることを隣の子からアドバイスしてもらったりすることがなくなる」というものもあった。教室という場所にいることによって得られる他者からの影響は多分にあるということである。

『生活科・総合的学習教育学会会報』第57号に掲載された北川由美教諭のアサガオ実践において、Kさんとクラスメイトとのかかわりが記載されている。実践事例の中で、Kさんは自分のアサガオだけが発芽しないことを悲しみ泣いていた。そのKさんに対するクラスメイトの言葉が温かかった。ある子どもは、「Kちゃんは、毎日水をあげていたよ。一生懸命お世話していたよ。だから大丈夫だと思うよ。」と言い、またある子どもは、「(手のひらを下に向けておでこの前にあて) この辺まで来てるんじゃない?だから、もう少し。」と言い、さらにまたある子どもは、「僕の、いっぱい出てるから、1つ分けようか?」と言った。「もう少し待ってみる」と返したKさんのアサガオの芽はその5日後に無事発芽した。北川教諭はその事実をKさんから直接聞いたのではなく、我が事のように喜ぶ他の子どもたちから聞いたという。このKさんとクラスメイトに見られるような温かいかかわりを、果たして遠隔の授業においてどのように実現することができるのだろうか。

上記の学生との議論や北川実践からいえることは、生活科学習にとって教室での子どもたち同士のかかわり合いが大切であるということである。生活科は思いや願いを実現する過程を大切にする教科である。その思いや願いは、上記のような他者からの励まし合いや学び合いの中で育まれていく。それ故、生活科学習にとって学校の存在は大きいといえる。新型コロナに対応するためにも、また、新型コロナ終息後の未来にその教訓を生かすためにも、従来型の学校教育のオルタナティブを考えて実践していく必要はあるが、他者とのかかわり合いをいかに実現するかという視点は欠くことができないだろう。

「Covid と音楽活動～音を出すだけが音楽活動ではない～」

新山王 政和（音楽教育講座）

音楽科を含む実技系教科は、Covid による影響を受けて専門教育の在り方のみならず教科の本質についても根本的に捉え直すことが促された。多くの音楽活動や様々な行事が中止になり教育活動も制限される中、個人練習や演奏を伴わない活動などを工夫することで凌いできたのだが、音楽という分野が「聴き手」の存在を前提とする活動を基盤としており、その「聴き手」の側からのリアクションや反応が自らの演奏活動の自己評価となり自らの学びへ繋がることを考えると、遠隔授業による指導やアドバイス、それを受けた個人練習だけでは十分な教育効果を提供できないことは明らかである。よって、可能な限りの感染対策を児童・生徒や学生自身も含めて創意工夫した上で、「音を出して、演奏を伴う活動」を実施する方向で試行錯誤を重ねることが、我々音楽科教師へ課されている責務であろう。文末に添えたとおり、検証実験に基づく分析的な研究報告が増えつつある。冷静な視点に立つて知恵を出し合い、情報を共有していきたい。

冒頭述べたとおり、今回の Covid は音楽科の本質に関わる議論も促している。「歌えない、楽器が吹けない」という嘆きを多く耳にする一方で、音楽鑑賞や音楽づくり・創作分野の教材研究が活発に行われ、授業実践が試みられている。先行研究によると「音は頭の中で音楽になる」とされるが、これには二つの意味がある。一つはアウトプット（発信）の基礎となるもので、楽譜を見て頭の中で音符を音の響き（音色、音高、強弱）に置き換えて脳内再生しながら楽しむ精神活動のことであり、「内的聴覚」や「ソルフェージュ」の一部でもある。これは演奏者が楽譜と向き合って楽曲分析（アナリーゼ）を行い、どのように演奏表現するのか構想をデザインして「思いや、その意図」を構築する際に必要とされる基礎的な能力へと繋がるものである。そしてもう一つはインプット（受信）である「知覚と感受」に関わるもので、音響的な響き（音色、音高、強弱）を聴覚的にキャッチして、それを視床下部に於いて「音や音楽」に変換・再構成するという「センサ&プロセッサ」的な捉え方である。その「音楽に変換・再構成」する際には、頭の中では「音の繋がり方（メロディ）、重なり方（ハーモニー）、並び方（リズム）」として処理したり、音をグルーピングして「まとまり（フレーズ）」に構成し直したりすることで、音響が意味のある音となり、さらに音楽へと構築していくものである。この場合、聴こえてくる音を意識化することが知覚であり、意識した音を意味のある音や音楽へと変換・再構成するプロセスが感受になる。音を発する演奏活動が制限される中で、鑑賞分野に於いて音や音楽の特徴に注目して音楽を聴いてそのよさや面白さに気付く活動をしたり、音楽づくり・創作分野に於いて音を曲や音楽へと構成していく経験を積んだりするなどの、これまで手薄であった脳内音楽活動を積み重ねたことが、学習者の「知覚と感受の力」を触発したと言えよう。

[参考文献：検証実験に基づく分析研究の報告例]

* 国立感染症研究所「趣味など余暇活動に関連する集団感染事例」

* クラシック音楽公演運営推進協議会、一般社団法人日本管打・吹奏楽学会「クラシック音楽演奏・鑑賞にともなう飛沫感染リスク検証実験報告書」

* トヤマ楽器製造株式会社「リコーダー演奏時の微粒子可視化評価・撮影結果報告」

* 国立音楽大学「声楽および管楽器演奏時における空気流出に関する実験結果」

新型コロナと学校教育

杉林 英彦（美術教育講座）

昨年2月に政府が「臨時休校要請」を出し、全国99%の小・中・高校が休校処置を行った。新型コロナの感染リスクや予防対策などが整理されてない状況であったが、タブレット端末などが十分にある学校では、早々にオンライン授業を取り入れていくことになる。しかし、当時は児童生徒の家庭でタブレット端末の有無や、Wi-Fi環境が十分に整備されている状況ではなく、オンライン授業が必ずしも有効な対策ではなかった。多くの学校は、教科書やワークシートなどの教材を児童生徒の家庭へ届け、紙面での課題提示を行い、児童生徒は登校日までにその課題を行う状況であったようである。Wi-Fi環境の整備やタブレット端末の普及が進むにつれて、YouTubeなど動画サイトに教材コンテンツがアップされるようなる。

図画工作科・美術科教育においても、同じような状況で、主に教科書会社や教育委員会、BHK for school「きみならなにつくる」などが3~10分程度で単元・題材の導入や学習のポイントを解説する動画を独自に製作・アップしている。いくつかの動画を視聴したが、コンパクトにまとめられていて、家庭にある材料・道具で学習ができる内容が多い。やや鑑賞の学習内容が多いようにも思う。そして、何よりもやその動画に登場する指導者が、児童生徒が不安にならないように、明るく元気な笑顔で話している。その動画を視聴する児童生徒がどんなに勇気づけられただろう。ただ、その動画を児童生徒が一人で視聴しているのか、保護者などと視聴しているのかで、映像の理解や学習の質に差がでてくるのではないかとも思う。図画工作科や美術科の学習は、造形的な見方・考え方を学ぶ内容であるため、動画では詳細に伝えられる学習の見通しや、段階的な支援を保護者に協力を要請できる環境が望ましいが、様々な要因で実現が困難な状況であったと思う。

そうした中、愛知県で5月下旬から徐々に学校が再開され、児童生徒は対面での授業を行ってきた。図画工作科・美術科教育でも、様々な対策が取られた。あるテレビのニュースで中国では、学校再開当初に造形的な活動（陶芸）を促し、子どもの心のケアを行っているとあり、驚いた記憶がある。感染予防対策の観点から、筆者は例年のように学校現場で図画工作科・美術科の授業を見る機会はないが、10月から実施された学部や大学院生の教育実習の訪問指導の際に、学校現場の対応などをみることができた。10月の段階では、新型コロナの特性や対処方法が整理されはじめ、子どもへ重症化リスクの低さが分かり、学習環境もやや緩和した状況になっていた。訪問した全ての学校では、児童生徒、教職員全員がマスクをし、教室内の机も間隔を開けており、基本的な対策は徹底されていた。教科の特性上、限られた蛇口での水道の使用や、道具や材料の共用などの接触や密になる状況に対して対処が必要になるが、想像以上に児童生徒が主体的に感染予防に取り組んでいる様子を伺えた。

また、タブレット端末の普及が進み、教員と子どもたちが共にその有効活用も模索している現状にみえるが、図画工作科・美術科教育では学習内容・方法上で大きな期待をしている。学習内容としては教科書にタブレットを使用した学習内容があるが、これまで機器が十分に無かつたためできなかつた映像表現学習ができること。学習方法としては、映像として学習の記録ができ、学習過程や造形的な見方・考え方を視覚的に捉えられること。このことは、児童生徒の自己評価だけでなく、学び合いとしての対話・共有にも活用できるツールとなるだろう。

コロナ禍転じて福となすアイデア

鈴木 一成 (保健体育講座)

問1. 何とかいてあるかな？

(2m以上 離れてみてください)

これは、2020年5月6日の岐阜新聞に掲載された広告です。一見、水玉の幾何学模様ですが、2m以上離れると浮かび上がるメッセージがあります。

近すぎてみえなかつたもの、
みえにくかつたもの。
あえて距離をとることで、
みえてくるものがあります。
コロナ前を知る私たち
だからこそ、
できことがあります。
近すぎて、みえなくても、
少し離れると、
みえてくる大切なメッセージが
あります。

教室や廊下に掲示して子どもたちと一緒に少し離れて見てください。

あえて、2m離れよう！大丈夫！

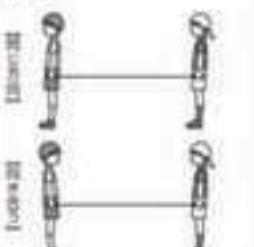
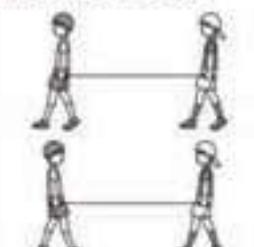
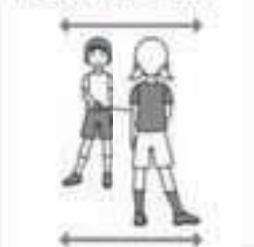
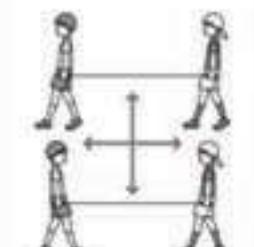
離れていても心はひとつですから。

問2. 下の活動をやってみて、問1のメッセージを体感できるかな？



ソーシャル・ディスタンスを表現した絵画です。ステイホーム中の皆さんに楽しみを。

参考；2020年5月6日岐阜新聞

初級 なわ あり	①その場で（なわあり）	②前後（なわあり）	③左右（なわあり）	④ランダム（なわあり）
	ペアで短なわ（約2m）をもつ	①で前後に3歩（はじめは、ゆっくり） なれたら歩数をふやしたり、はやくしたり	①で左右に3歩（はじめは、ゆっくり） なれたら歩数をふやしたり、はやくしたり	①でランダムに歩く リーダーを決めて！ ちょうど張りで！
				
	なわは、ちょうどよい張り具合で！			

参考；鈴木一成(2020)知っておきたい運動教材No2, 大日本図書

これは「からだが覚えるソーシャルディスタンス」です。これを「初級」として、中級は「なわをその場に置く」、上級は「なわなし」、あるいは人数を「トリオ」にする等のアレンジも可能です。人との距離には「身体的距離」だけではなく「心理的距離」もありますから、活動前後に「今の気分は？」と問い合わせ、互いの動きに応じる心理的な距離に着目させていきます。「離れていても心はひとつ」の体感。身をもって知ること・相手の身になることを期待したこの活動が、心と体を一体としてとらえる一助になれば幸いです。学びの力で、コロナ禍転じて福となれ！

新型コロナウイルスパンデミックと教育のニューノーマル

太田 弘一（技術教育講座）

新型コロナウイルスのパンデミックは、これから先人類をあげてのウイルスとのたたかいを私たちにいやというほど迫っています。コロナの他にも強力な毒性を持った新型インフルエンザウイルスの発生も予見されています。私たちの生活はこのウイルスの感染防御とともににあることが日常になり、人類は「ニューノーマル」の世界に入ったといわれています。学校教育も「ニューノーマル」を構築する必要があると考えるところです。ここでは、技術教育の視点を基本にいくつかの観点を提案したいと思います。

第一に、ウイルスの感染防止が日常となっていることからすれば、当然、ウイルスに関する知識を我々が持つことが最も重要です。すなわち、学校教育の中で、このウイルス病に関する教育をしっかりと位置付けることが必要と考えます。このウイルスとの闘いが、人類的課題であることからすれば、教科としても体系立てた教育内容を至急確立する必要があると考えます。ウイルスに関する基礎的な生物学的知識(厳密には「生物」と定義しきれませんが)から、感染の仕組み、感染防止の方法、病気の発生の仕組みなどを含めて、子どもたちの発達段階に応じて分かりやすい学びを体系立てて作って、実施することが急務と考えます。この内容は、基本的には医療であり、医療技術の範疇に位置づくものと思います。これまでの教科としては「保健」ということになると思いますが、ウイルスの特徴と病理の仕組みを理解するためには「理科」「生物」の基礎知識が不可欠です。また、感染防止の方法は、換気のための教室の構造やマスクの纖維やデザインなどの「技術」「家庭」にも関連する技術的な内容が含まれます。これらの内容は、教科横断的な取り組みということになるかと思います。むしろ、以下の内容も含めて、教科の体系そのものを根本から見直すことが必要となるようにも思います。

のこと以上に、「アフターコロナ」と言われるようなところで、産業構造も含めた社会のあり方や生活の見直し(例えば「グリーンリカバリー」等)が言われており、こうした人類的課題を視野に入れての教育体系を根本から検討することが必要となっていると考えます。

第二に、技術教育の観点から見ると、ふたつの内容があります。ひとつは、このウイルスに関する学びは、技術の生物育成の中で、作物の栽培や家畜の飼育の中で、発生するウイルスなどの病害防除の技術と重なります。ウイルス理解や感染メカニズム、防除の前提としての免疫(植物には動物にある「獲得免疫」機能はないが、「自然免疫」類似の防御機能は存在)の理解と、対処法(防除技術)の学習は技術教育の学習課題であり、コロナウイルスの学びの体系と連動するものです。

もうひとつは、感染予防に関わって、社会的に ICT 技術が一気に浸透し、リモート授業のツール等教育の手段としても広まりつつあります。これは技術教育の中の情報技術でもあります。さらに、この技術は、現在進められている「Society5.0」にかかる教育内容とも連動するものです。関わって、ここで強調しておきたいのは、上記したコロナ後社会を見すえた「グリーンリカバリー」等の内容は、「Society」を遡って、農耕や畜産(=Society2.0)であり、さらに自然エネルギー利用等であり、人類社会を支える基本的な生産技術が再評価される時代になるということを意味しています。

紙数がないため端折っての説明となりましたが、以上がニューノーマルの教育の中心となるべき観点と考えます。パンデミックを止揚する教育体系の未来に向けての視点です。

新型コロナウイルス感染症流行期の調理実習

筒井 和美（家政教育講座）

調理実習は調理の技能技術の習得によって、自分や家族の食生活を豊かにするための実技系科目である。これまでの対面授業では教師の示範を観察したり、学習者同士で料理の出来映えに意見を交換したりする等、様々な体験を通して調理技術の向上や自己肯定感の高まりにつなげている（筒井ら 2020）¹⁾。2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大にともない、学校教育においても生活様式の変化に対応しながら、授業内容の検討がなされている。日本調理科学会のアンケート調査（2020）²⁾によると、新型コロナウイルス感染症流行にともない大学や短大等の調理学実習（n=68）の授業形態は対面授業と遠隔授業の併用（57%），遠隔授業（30%），対面授業（13%）の順に高かったと報告されている。2020 年度の調理実習は主にオンデマンド型遠隔で進めたため（一部、Microsoft Teams を活用）、その一例として教育学部 1 年生を対象とした後期の調理実習 I の教材開発について紹介する。

まず、大学生は千切り、みじん切り、乱切り等の切り方はよく理解しているが、面取りや隠し包丁、蛇腹切りなどの習得度は低いことが課題である（筒井・浅野 印刷中）³⁾。魚類の喫食頻度が低いため、イカさばき、魚の三枚おろしができない者が多い。このような背景から、これまで対面授業で配布してきたレシピ資料を基に、2020 年 7~9 月に和食（里芋といかの煮物、鰯のつみれ汁、茶碗蒸しなど多数）を試作し、各操作で写真や動画をそれぞれ撮影し、新しくデジタル教材を作成した（筒井ら 2021）⁴⁾。これを大学のまなびネットを活用したオンデマンド型遠隔授業の資料の一部とした。これまで対面授業では、前述のようにグループで調理し、その後の料理の出来映えについて教員をはじめ他の学習者の意見を参考にできたが、遠隔授業では自宅で各自調理する都合上、独自に作成した自己評価票を用いて外観や味付けなどを 3 段階で評価してもらった。これまでの授業形態とは異なるが、調理経験が少ない大学生でも新しい教材を用いて自宅で和食を完成させられるようになり⁴⁾、受講前の 10 月に比べ自己肯定感や積極性が増したと推察される。教材開発を通し、授業者として授業内容を改めて見つめ直す機会になった。

最後に、日本調理科学会では対面で調理実習を実施する際のガイドライン²⁾を提案していることも申し添える。

1) 筒井和美ら：生活認識形成を意識した調理実習の献立作成とその教育効果、愛知教育大学研究報告 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編 69, p.61~68 (2020)

2) 日本調理科学会：COVID-19 下の感染症拡大防止に配慮した調理学実習実施のガイドライン（2020 年 11 月 30 日）<http://www.jscs.ne.jp/sheet/jissyuu-guideline.pdf> (アクセス日：2021 年 1 月 12 日)

3) 筒井和美・浅野友花：調理技術の習得を目的とした蛇腹きゅうりの動画教材の開発とその活用、食生活研究（印刷中）

4) 筒井和美ら：和食調理のデジタル教材の開発・利活用を通した料理の出来映え、自然観察実習園報告 40, p.1~8 (2021)

対話活動の工夫 - Writingによるコミュニケーション活動 -

松井 孝彦 (外国語教育講座)

「新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動に関する提言」(令和2年5月1日)は、本年度の学校教育に関する方向性を示してくれたことから大変にありがたい提言であったと思います。しかし、同時にいくらかの科目に関わる授業では頭を悩ませる方策も示されていました。

外国語教育においては、コミュニケーションを図る資質や能力を育成することが求められています。そして、多くの場合ペアやグループでの「話すこと」による対話活動によって、その資質や能力を育成していくことが普通でした。しかし、同提言の中で「マスクの着用」「児童生徒の席の間に可能な限り距離を確保(おおむね1~2メートル)、対面とならない(ような形とする)」に留意し、感染のリスクが高いと考えられる活動を行わないよう指示されました。音楽科、家庭科、体育科・保健体育科とは異なり外国語科は直接科目名が明記されませんでしたが、「コミュニケーション活動をどのように行えばよいか」と悩まれる先生方は多く、私もいくらか対応策に関する質問を受けました。

私が回答の一つとして提案したのは、「Writingによるコミュニケーション活動の導入」でした。コミュニケーションに関する詳細な定義は割愛しますが、「話すこと」ではなくとも「書くこと」、つまりWritingによるコミュニケーションも可能です。小学校での実践は難しい(そもそも無理)ですが、ここであらためて2つの活動をご紹介します。

【チェーン・レター (中嶋, 2000)】

- ※ ペア以上であれば活動は可能です。3名以上で行うことをお勧めします。
- 生徒一人一人に1枚ずつ紙を配付する。
 - あるトピックについて自由に意見を書かせる。トピックは教師が用意しても、生徒が各自で考えてよいこととする。書かせる時間は5分程度を基本とし、生徒の実態に応じて調整する。
 - 時間が来たら、例えれば列の前の人用紙を渡させる。生徒の手元には列の後ろの人から用紙が届くことになる。その用紙を2分読ませ、「前の人の意見に反論しなさい」と指示を出し、反対意見を書かせる。
 - 時間が来たら、同様に用紙を送らせる。これ以降は、前の人記述をすべて読ませ、納得できる意見に対して自分の意見を書かせる。
 - ある程度勧めたところで終了とする。その際、最初に名前が書かれている人に用紙を戻し、「納得がいく意見や、これはいいという意見」に線を引かせ、感想を書かせて提出させる。

【手紙交換】

- ※ 3人以上のグループで行わせます。全員に紙を配付します。
- 教師が決めたトピックについて、自由に意見を書かせる。
 - 時間が来たら、時計回りに手紙を差し出す。
 - 受け取った手紙に対して、返信となる内容の手紙を書かせる。
 - 時間が来たら、反時計回りに、つまり、手紙の差出人に手紙を戻す。
 - 受け取った手紙に対して、さらに返信となる内容の手紙を書かせる。以下、同じ相手と手紙のやり取りを繰り返させる。
 - ある程度の回数で終了させる。

これらの活動は、コミュニケーションの相手が異なるという違いがあるだけです。しかし、それでも対話の質は全く異なります。昨今の状況下におけるコミュニケーション活動の具体例として、参考にしていただければ幸いに思います。

参考文献

中嶋洋一 (2000) 『学習集団をエンパワーする30の技』 明治図書

新型コロナと道徳教育

野平 慎二（学校教育講座）

1. 公正・公平・社会正義

新型コロナウイルスの感染拡大は、差別をはじめとする人間の醜い面を如実に浮き彫りにした。至る所で「コロナよりも人間が怖い」と言われた。なぜ差別が引き起こされるのだろうか。理由のひとつに不安の感情を挙げることができるだろう。新型コロナウイルスのワクチンはまだ実用化されていない。未知の恐怖に対して不安を抱くのは自然なことである。逆に言えば、見通しをもつことができれば、疑心暗鬼になることは避けられる。実際、既知のインフルエンザは、予防法や対処法が知られているため、大きな混乱をもたらさない。新型コロナウイルスに限られないが、「見通し」が安心の条件であると言えるだろう。根拠のないまま「不安になるな」と心構えを説いても意味はない。

2. 真理の探究・相互理解・寛容

見通しを示す役割が期待されるのは科学と政治である。科学は、未知のものについて、試行錯誤を繰り返しながら探究を重ね、真理を明らかにしてきた。もっとも、明らかになった真理はつねに暫定的なものであり、状況が変わって新しい問題が出現すると再び試行錯誤と探究が始まる。この意味で、未知のものの解明の過程は、知識の可謬主義と実用主義を掲げるプラグマティズムに立脚していると言えるだろう。この時、試行錯誤の過程では失敗はつきものである。「失敗してはいけない、誤りは許されない」という正答主義、完璧主義ではなく、失敗を許容し、丁寧に振り返り、次に活かす姿勢が大切である。

3. 信頼・よりよい集団生活の充実

日常生活は科学的な合理性のみに立脚して営まれているわけではない。ウイルス対策として科学的には「社会的な距離取り」が有効であるとしても、人と人の接触や移動が制限されすぎると経済活動の停滞という別の問題が引き起こされる。政治には、科学的な知見を踏まえながら複眼的、総合的な視野に立って判断する役割が求められる。この場合も、最初から正解が明らかであるわけではなく、プラグマティックに判断を下していくしかない。科学を専門とする科学者がその守備範囲を超えて政治的判断を下すことも、政治家が科学的な知見を踏まえないまま政治的判断を下すことも、ともに不適切である。また、どれほど正しい知見や判断であっても、科学や政治を人々が信頼していない場合には、人々は耳を貸さないだろう。ことごとく李下に冠を正してばかりの対策に信頼が寄せられないのは当然である。信頼は政治的、社会的連帯の重要な機能である。

4. 自主・自立・連帯・想像力

悲しいことに、感染者が犯罪者のような扱いを受けるのがこの国の現実である。どれほど予防していてもどこで感染するかわからないのがウイルスのやっかいなところである。その意味では誰がいつ「加害者／被害者」になってしまふかわからない。このような状況のなかで必要なのは、「お互いさま」の感覚ではないか。感染しないよう努めることは大切だが、「自分だけは大丈夫、自分は正しい」という無謬の意識や、ウイルスを完全に封じ込めようとする発想は非現実的である。非現実的な発想を実現しようとすると、むしろそちらのほうがより多くの無理や歪みを引き起こす。大切なことは、これもインフルエンザの場合のように、ウイルスを完全に封じ込めることはできないという前提に立って、感染しても安心に生きられる仕組みを政治的、社会的に整備することではないか。「自立した人間として他者とともにによりよく生きる」という道徳性は、そのための不可欠の基礎だろう。

新型コロナウィルス感染拡大が学校教育に与えた影響について

飯塚 一裕（特別支援教育講座）

2020 年に世界で猛威を振るった新型コロナウィルスによる影響は学校教育にも及びました。特に全国的な休校措置は私たちがこれまで経験したことのない大きな衝撃があったように思います。先日、本年度から高校生になったある自閉症スペクトラム障害の男子生徒の保護者と久しぶりに話す機会がありました。彼は小学校から中学校まで学校不適応の状態が強く、不登校の期間が長く続いていました。人が多いと緊張してしまうため昼間に学校に行くことができず、たまに夕方学校へ行くこともありました。その彼が高校には一日も休むことなく通えており、クラスの委員を務めたり部活に精を出したり、充実した高校生活を送っているようでした。保護者からは、3 月から 5 月の休校期間に彼なりのリフレッシュができたことがよかったですとの話がありましたが、学校には行かなければならぬという暗黙のルールにしばられ、苦しい状況に置かれていた彼にとって、休校期間が気持ちを切り替えることのできるきっかけになったかもしれません。もちろん彼のように一斉休校がプラスに働いたケースの方が少なく、戸惑いの方が多いかと思います。

こうした子どもたちが学校に行って対面の授業を受けるということが当たり前にできないような状況の中で、子どもの学びを保障するためには ICT 機器の活用やオンライン授業などの取り組みを進めることが重要です。愛知教育大学附属の発達支援相談室では、発達障害のある小学生を対象とした集団でのプレイセラピーを実施しています。普段は学生セラピストと子どもが集団でルールのあるゲームなどに取り組んでいますが、本年度は皆で大学に集まって活動をすることができず、web 会議ツールである ZOOM を利用したオンラインでの活動とせざるを得ませんでした。ZOOM の特性上、画面に何人の顔が映し出されていて誰が話しているかわかりづらいことや、同じタイミングで複数人が話すと大きい方の声や先に話した方の声が優先され、もう片方が消されてしまうことなどから、対話のリズム感が対面のときよりもスムーズにいかない場面が見受けられ、学生セラピストは子どもたちとの関わりに苦労しているようでした。

一般的に、オンラインの会話では非言語的応答が発揮できないなどの制約があるとされます。相手の目を見たり、相槌をうつたり、うなづいたり、ジェスチャーをしたり、姿勢を変えたりといったことが、相手の発話に対する臨機応変な「身体による豊かな応答」とされます(諏訪, 2020)。こうした身体による様々な非言語的応答のスキルがオンラインの会話では発揮しづらいため、コミュニケーションの難しさを感じる人が多いのではないでしょうか。発達障害、特に自閉症スペクトラム障害にはコミュニケーションの困難さが見られ、場の空気や雰囲気を読むことが苦手な子どもが多いです。新型コロナウィルスによる影響はまだしばらく続くようです。ZOOM などのオンラインで発達障害のある子どもたちへコミュニケーション支援を行うためにどのような工夫が必要か、今後検討していきたいと考えます。

【引用文献】諏訪正樹(2020), 生身の身体で世の中に接し、意味を醸成すること, 発達第 164 号, 69-75

保健の授業における感染症のこれまでとこれから

山田 浩平（養護教育講座）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、世界保健機関（WHO）により「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」を宣言され、パンデミック（世界的な大流行）の状態にあると表明された。そして現在、世界の感染者数、死亡者数は増加の一途で、感染は約200カ国・地域に拡大している。学校教育における感染症の予防に関する内容は、保健体育科の「保健」がその一翼を担うことになるが、このような新たな感染症が感染拡大した状況は、我々が改めて「保健」が担う役割を考える機会となっている。そこでまずは、新型コロナウイルス感染症も含めた感染症の予防について、学習指導要領における保健の学習の位置付けについてみたいと思う。

学習指導要領における感染症について小、中、高等学校それぞれの学習指導要領解説に示されている内容（性感染症は除く）について確認すると表のとおりとなる。今回の改訂では、小中学校について変化はないが、高等学校では中学校と同様に感染症の予防の内容が一つの項目として独立して示された。このように、感染症の予防は1つの小単元を形成する学習内容となっている。

次にこれまでの感染症の予防に関わる保健の授業方法についてみると、その1つに科学史を分析して科学的概念がどのようにして明らかにされてきたかの過程をたどる方法がある。しかし、保健の授業で扱う教育内容には科学的な概念といえる内容とそうでない内容が入り混じっている。例えば、糖尿病といった生活習慣病には病気とそうでない状態との間に明確な基準が示されているが、強迫神経症といった精神的な疾患には現在のところ明確な基準はない。つまり、私たちが克服しなければならない健康課題はまだ解明されていないがために健康課題であり、教育内容として取り上げる健康課題が十分に科学的に解明されていないということが起こる。さらに COVID-19 のように新たな健康問題を学習内容として取り上げざるを得ないこともある。このような未知の健康課題に直面した時に、より効果的に対応のできる児童生徒を育てるためにはどのような保健の授業を行えばよいのか。この問題に対する一つの答えは、学習者が授業の中で思考をめぐらし自分なりの考えを作り出すような授業を作っていくことにある。教師から答えを教えてもらいそれを覚えることに終始している学習者は、将来、答えの分からぬ未だの健康課題を前にして座して誰かが答えを教えてくれるのを待つしかないのである。

表 学習指導要領における体育・保健体育の感染症に関する記載

	小学校学習指導要領（H29告示）	中学校学習指導要領（H29告示）	高等学校学習指導要領（H30告示）
内 容	<p>(3) 病気の予防について、課題を見付け、その解決を目指した活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 病気の予防について理解すること。</p> <p>イ 病原体が主な要因となって起こる病気の予防には、病原体が体に入るのを防ぐことや病原体に対する体の抵抗力を高めることが必要であること。</p> <p>イ 病気を予防するために、課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、それらを表現すること。</p>	<p>(1) 健康な生活と疾病の予防について、課題を見出し、その解決を目指した活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 健康な生活と疾病的予防について理解を深めること。</p> <p>イ 感染症は、病原体が主な要因となって発生すること。また、感染症の多くは、発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めることによって予防できること。</p> <p>イ 健康な生活と疾病的予防について、課題を見出し、その解決に向けて思考し判断するとともに、それらを表現すること。</p>	<p>(1) 現代社会と健康について、自他や社会の課題を見出し、その解決を目指した活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 現代社会と健康について理解を深めること。</p> <p>イ 現代の感染症とその予防・感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人の取組及び社会的な対策を行う必要があること。</p> <p>イ 現代社会と健康について、課題を見出し、健康や安全に関する原則や概念に基づいて解決の方法を思考し判断するとともに、それらを表現すること。</p>

保育現場における COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の禍を追う

鈴木 裕子（幼児教育講座）
横井 良憲（大学院幼児教育領域）

2020年3月、突然のCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）の渦は、当然ながら幼稚園、保育所などの幼児教育施設にも降りかかった。本学大学院幼児教育領域には、現職の園長や保育者が在学しており、各園で様々な対応を迫られることになり、お互いの園の情報を交換する日々となった。感染症は幾度となく人類史に襲いかかり、時には文明を存亡の危機に追いやつた。天然痘を除く感染症は根絶されておらず、多くの感染症とは今も共存している。感染症と人類の歩みを振り返れば、未知の感染症について正確な全体像を捉えることができるは、流行が終息ししばらく経つてからである。しかし、私たちの研究室では、現在の情報交換をもとに、混乱の「今」の記録を取り、保育者がどのようなことに困り、危機管理上どのような意味を持つのかをリアルタイムで分析していくことになった。院生の勤務する自園を含め、愛知県、神奈川県、岐阜県、広島県の保育施設に対してインタビュー調査を行った。第1期は緊急事態宣言下の2020年5月、第2期は緊急事態宣言解除後の同年7月、第3期として第3波襲来の12月に実施した。本稿では、第2期までの結果の一部を紹介する。

第1期と第2期に共通して複数施設が挙げている「困りごと」は、感染症対策、行事の見直し、休園等による子どもの姿の変化、マスクにより保育者の表情が子どもに見せられない、の4つであった。密や対面、触れ合い、遊具共有の回避などが保育ではいかに難しいかがわかり、期せずして保育の本質を改めて意識することになる。それに伴い、行事についても、食体験、お泊まり保育、保護者の参加の可否や対策など、これまでにない判断を次々と迫られ、感染症対策と理想の保育の間で葛藤する保育者の苦悩が吐露される。しかし2期になると、ネガティブな面だけでなく、この機会を行事の見直しの好機とポジティブに捉える語りも見られるようになる。また、保育者として子どもの健全な発達や成長を心配する様子はいずれの施設でも多く語られた。「子どもの生活リズムの乱れや発達の遅れが心配」「園生活を普通に送っていた子が、すごく敏感になっていたり、再開したら興奮した状態で登園する子もいたりするだろうから、どんな新学期になるのか心配」といった回答からは、家庭に閉じこもった子どもの発達や成長を危惧し、そのような子どもたちを、ある時期に突然受け入れる状況の困難さを予測する。やや異なる困りごととして「マスクを使うようになって、表情を隠すという問題点がわかった」や、「子どもとのかかわりを考えると、マスクをしていると表情が伝わりにくいことと、子どもが言葉を覚えていく過程で口元が見せられない」のような語りがあった。私たちは、保育施設で長期的に保育者の口元がマスク等で隠された状態が、子どもにどのような影響を与えるのかについて、危機管理と保育の両立の面からの研究を始めたことにした。

一方、職員の負担、職員勤務シフトの見直し、衛生資材の不足、施設から感染者が出る不安、保育内容の見直し、家庭への支援不足は、第2期にはほとんど語られなくなった。「再開した際に、保育園のありがたみを感じたというお母さんが多かった」と語られたように、保育施設は子どもの育ちの場であると同時に、保護者や社会を支えるという大きな意義をもつことにも気付かされることになる。

新型コロナウイルス感染症は災害であり、保育施設において危機管理上のリスクをはらんでいる。生物的感染症としての問題点はもちろんのこと、心理的感染症や社会的感染症という捉え方も示されており、これらも保育施設の危機管理に影響を与える。現在進行形で必要な取り組みや支援もあり、また時間の経過と共に変化することも予想される。本調査から得られる知見は、新型コロナウイルス感染症と保育施設の問題を捉える同時に、他の災害が発生した場合の対応などの基礎資料となる可能性を持つと考え、調査を継続している。広く社会に保育施設における問題点が知られることで、社会全体の課題として理解を得られることを期待する。

コロナ禍における大学教育のとりくみを振り返って

齋藤 ひとみ (情報教育講座)

コロナ禍において、社会全体のあり方や人々の働き方、生活の全てが大きく変わった。教育現場においても、2020年2月27日に全国の学校に臨時休校の要請があり、5月31日まで臨時休校が続いた。その間、小中高等学校、大学では、学びを止めないための様々な取り組みが行われた。本学では、遠隔授業のみによる授業実施が5月末まで続き、対面の利用が可能になった後も、前期授業については遠隔のみのものが多かった。ここでは、本学におけるコロナ禍への対応から、組織としてどのような取り組みが必要かについて考察する。遠隔授業での実施が決まってから授業の実施までの取り組みをまとめると、表1のようになる。

表1: 遠隔授業の実施に向けた本学の取り組み

3-4月	<ul style="list-style-type: none">まなびネットの使い方を説明するコースの（教員、学生向け）準備まなびネットの使い方を説明するコースの開設まなびネットのコース作成オンライン授業の実施に関する説明会の実施1年生を対象とした通信環境などのアンケートPCセットアップ講習会での1年生への大学アカウント配布教員への遠隔授業の支援体制の周知質問用ML開設
5-7月	<ul style="list-style-type: none">MLへ寄せられた質問への対応まなびネットのサーバー運用、利用数の増加に応じた増強学生・教員への遠隔授業に対するアンケートの実施・分析
1月	<ul style="list-style-type: none">遠隔授業のアンケート結果や遠隔授業の事例紹介に関するFDの開催

これらの取り組みは、大きく3つに分けることができる。1つ目は、教材や課題の配布・提出などに使用するまなびネットの準備や通信環境のアンケートなど、遠隔で教育や学習をスムーズに行うための取り組みである。2つ目は、オンライン授業の実施に関する説明会や遠隔授業の事例紹介に関するFDなど、遠隔授業をどのように構築すれば効果的な学習ができるのかといった授業方法・学習方法の実践と情報共有である。3つ目は、遠隔授業の支援体制や質問用MLの開設など、学習者や教員に対する人的・物的サポート体制である。他大学や高校などでの取り組みをみても、この3点をバランスよく実施することが遠隔授業を実現する上でとても重要なことが示されている[1]。

Giga School構想により、義務教育での1人1台タブレット端末が実現しつつある[2]。高等学校でも普及は進んでいくだろう。今後は、今年度の遠隔授業への対応が、学生にどのような影響を与えたのかを総括し、遠隔授業のBad Practiceを反省しつつ、Good Practiceを共有して1人1台時代の新しい学びや教育へと活かしていくことだと考えている。

[1] 愛知県高等学校情報教育研究会研究協議会、オンライン学習支援ツールを活用した授業の在り方にについて、2021年11月10日

[2] 文部科学省、GIGAスクール構想の実現について、https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm

4. 編集後記

山田 浩平（教科教育学研究部門副代表 SCOPE 編集担当・養護教育講座）

みなさまには日頃より愛知教育大学教職キャリアセンターの教科教育学研究部門の活動に深いご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。本年度も教科教育学研究部門の副代表を継承し、SCOPE 編集担当として、ここに No.11 の SCOPEIII をお届けします。

今回の SCOPEIII では、「新型コロナと学校教育」として内容が取り上げられています。ここでひとつ大事な区別を確認しておきたいと思います。既にご存知の方も多いと思いますが、SARS-CoV-2 は今回の新型ウイルスの名前で、COVID-19 は病名、つまり感染症の名前です。それは、HIV がウイルスの名前で、AIDS が病名という関係にあるのと同じです。しかし、SARS-CoV-2 も COVID-19 も覚えにくく、なかなか私の頭には入ってきません。もしかすると、心理的な衝撃を緩和するために故意にそのような名前にしたのかもしれません。いずれにしてもここでは SARS-CoV-2 を新型コロナウイルス、COVID-19 を新型コロナウイルス感染症、両者をまとめて新型コロナとしています。本稿はこの新型コロナにおける学校教育の方向性について、各教科（講座）の立場から 17 人の先生に執筆していただいております。どれも教科教育学の知見に基づく興味深い内容ばかりです。

本誌をきっかけに、教育に携わる多くの先生と今後の教育の展開について討論できる機会になれば幸いです。